



顯昭陳狀
全

特別
^4
8181



石方甲云た歌せ雅

判云た去りてまぢやいしよまづよむにたけあて聞行
はをそのまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
なむいしよまづよむにたけあて聞行
あつてまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
品若たいていけなむにたけあて聞行
初昭存云た歌せ雅
もあつてまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
い常事也まぢもいしよまづよむにたけあて聞行
あつてまぢもいしよまづよむにたけあて聞行

いしよまづよむにたけあて聞行
とけらまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
おまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
いあつてまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
ふいしよまづよむにたけあて聞行
けあつてまぢもいしよまづよむにたけあて聞行
むいしよまづよむにたけあて聞行
いしよまづよむにたけあて聞行
いしよまづよむにたけあて聞行

善草

右信定

葉まぢもいしよまづよむにたけあて聞行

已存式文可謂道之真隆行為道之乱逆乎以弟之句
格腰之時上六寸之糸着和歌之巾解款何始改其姿
乎

同題

あまのねれとたそふり初めといふかしてはあまといふは正勝之乃初乎
右方尸云左方歌詞花集俊惠年云

はこも字はのくこりり海邊よまつあまねれはあれけり
其心何きこふあまの海とやふふたもとまを耳ふそり
やうねり

判云左方俊惠所方お似し左右方申云かやれ心は
推云

と幸事也但平貞文うおみ捨違ふたよひりて其初乃
はあひますよりあまの初とまくと縁甘ひ女を初て名
半川といふあまをまじり偏子従を断といふ花凡等也
初版陳尸云考あま集云

うまやりのあまといひ初めといまうりてあまを初りて
けりと思ひて貞文うあまをて名幸と縁せりあまの初といふ
あま集集乃初を初すもは初り初てあま初れり万葉
集乃初あまと思へばあまの初とあまの初といふは
只初を初初といふも世々初初を初て初初といふ初
字年あま集の初初り凡年又俊惠初初はあま初初といふ

と尋ふに付あふ枝は打但てはなれりしはまの使ひつゝ
とてはけりたれ我こそはるるもさきううまのめしむとさし
のよき詞難く庶幾歎

題昭宗云あま集集外取あ事おらうとまなけりとも
説るまあまもあま燕付り但堀河院百首懐唐意
伊細師問答云

けりまらふはけりてえけむあうりおのめこそはのこ
とよのよして付色は堀河院乃清前も今清浄寺とあまは
んたりともいふものよて別の難も閑人付り神をて後存
詠せりし申したけりともいひりりもたのあはるの

流傳えとて又神歌も付りたれ神は如品とは勝報は
しけり神したけりともいふものよて神は神は
口はたけり付色可有。事也但判相は万葉の順々
和歌の仮名を付りたれ和歌をうるとしと和しと取
い詞をうとて説の燕ふの有之は付りて順万葉名取
けりともいひて詞をいふ清浄寺は詩人あまの付りり
歌文を相しと作者の名やもあまあれを即讀な事
万葉中已有極々文章むの如也。也所謂を常悲歎
お乃付四首并序松浦乃仙媛佐用嬪面大伴の熊凝反或
情楮桐日本琴歌お序九首楳見縹見車持娘子竹取

浦島子英雄葛城王石川女郎贈大伴田主婦人獻新
田部親王歌并不知姓名人之歌乃傳子十六通贈答之
状十二通沈疴自哀文教喻名文鎮懷石名記亦之通
以上皆有題中又順多とい詞をも多しとも後人詞は似
作らざりしといふ事やい付る處又明り自多事不悉りかと思
はるるに本ノミい子今難付しと付し女又明り自多事不悉り
存むこと難く此村上河内年紀不詳只人ともいふこと
こと付る大うたをみ世に籍ありて書ありて尖上の事不
空烟滅しぬりことともいふ事やい付る處又明り自多事不
とも後燕やん中付しは事也内外傳に籍より定むる

翻譯之藏之真筆も制作論師之正存も世に不傳事
付るも展轉も寫る功よりて近中も書あり其付
て受習し丁智恵もいふ事付る也又故師時石記因る之
よいふ付るふいふ事付る也又故師時石記因る之
付るも展轉も寫る功よりて近中も書あり其付
事を出してこそたうりともいふ事付る也又故師時石記因る之
万葉の事後ありけいほことともいふ事付る也又故師時石記因る之
付るも展轉も寫る功よりて近中も書あり其付
同類の事付るもいふ事付る也又故師時石記因る之
かろく付るもいふ事付る也又故師時石記因る之

けきやうをたとして詠けりふふや又後撰よ

けり白けす花さうし集れしとけて君はさうも遊むむ
如尾ふまぬをきて付れは初白けは昔あめちふらぬくや
羊と句にはすの奇おもや夜あうりと付りたる中夜をを
あうはとよく水勢をたたくともも野を羽うくの詠ふ
けきとしてけきといひ打但てきよもぬとあれを羊と句といふ
け難をたぬあうりふ事不足所法飲ともと判老と實
事と事きし力知て詠難て付れは存すりふ事付り世ま
しふふ乃ちいひ風情をきたうし丁亥年とたふぬし
しと集は空のたふらうりてとゆれたる古書在の存やありむ

とる家あははしはのこもはましたのこ美事とめけり
子をみくたやんまうにやまあはのめまてせうもた
にといひ付舟しや夜宿の心と起りまきしとあめしと
見くたをむとちあはあやうふ事おはきてあうしと
古今弄小

玉柳を町いふふもまきしとひしれめやうふさり柳をさ
是と事さふ柳ふらけとぬてはまにせとふぬてすね
けりまきしと茶もまはさぬ山屋いものうらな移り
是と事けりぬ山屋とて當りま物けりし
尾ふやうし山はまきしとけりぬ世甲て住りぬとよ

すまはたありきなりとて事あるに況ま候やいあり
ふふいけしむらつて子細きしは子似りて事也於
吾若はよの詞多きも是より聞か付るあり右とては
少く付しあり

形紙内云判詞よすの詞体不足聞か付るあり
よふとも多きくふまの道下付めを捨て

天曆帝御製

白紙のちやふすとたもすまの信のま妙はとてしれ
世所影もあつて極白もあつてふふと如今とて世捨て
ふ 貴之

ふふふふとたれあつたふふふ別れいしとてしれ
古今集よ 兼覽大まき

惜しむ人ふ心とてふふふた乃何とてあつたふふ
後撰集よ 中細く教るに

おたよとてふふふの詞多きも是より聞か付るあり
同集に

名はうて道にふふふ乃あつたふふふの詞多きも是より聞か付るあり

但年来諸撰集よいふふふ^点けふふの詞と不足吾若は
とも知り付るありとてしれあつたふふふに措けり
詞多しとてふふふの詞多きも是より聞か付るあり

一とて人いふをまかしくは嘆きたりと云う物と思ひけりけむ
 けりし後と糸院へ移はせ給ひて諫園の年園宗よむを
 を受てよと世と世人といふとまじはれ給ひての府通信は
 乃とておとす一とやうに入侍たるをまじはれ給ひて
 あらふて早きれと世とをとり詞のまじはれ給ひて
 付られし物もまじはれ給ひて侍ももの居あはれて侍もま
 じはれ給ひて侍もまじはれ給ひて

四葉大納の殿は新工

けりしとて人といひけり山国は花をとりたるのありけり
りまじ

とて又給ふ新工は快袖と殿の弟一乃とて侍もまじはれ給ひ
 花をととり詞は長日所よとて侍もまじはれ給ひて世給
 けりしとて人といひけりお餅もまじはれ給ひて
 万とてお餅もまじはれ給ひて侍もまじはれ給ひて
 てけりしとて人といひけりお餅もまじはれ給ひて

春下

蛭

左顯昭

山明は自よわたりとて侍もまじはれ給ひて
 右申云う侍もまじはれ給ひて侍もまじはれ給ひて

鳴らうと川とらふおれは万葉乃林部よこを入る色紙お
とをけりてふふう起るに林もさあふりごと万葉を果し
岩おほくしゆりれ陳云蛙乃歌古事撰集よと奇合にと
近世よふま歌よ詠あまかひやう下り形を既しよあふ付
て蛙の起るういやふふん有竹箱手又詠云かひんをと春
ふもむしと疑尸也又陳云ういやしりりし下り形のまあり共
中よ田舎ふこわか屋をういんをりり下り下り蛙こととらん存よ
まのく集りや古氏とて道とくいやうり也よまきし下り傳あてあし
まの詠云けあふいこ詠ふこよ四月より的事也林乃詠云
子不審あま又陳云くひんはくううま六つ月よとてまの
まの詠云

たれを喜も有ふと陳その下り鳴るんことうおと又之月おと
うれすうと形うけい不の者お違はれ

判云左歌かひんをうちん子陳云とハ打作ぬり奉とかひんを
下ととらふれとの字ことあしりしく聞ゆ又くいんをと春
ふあふむやれしこ詠ふとふたねはらあふあははしり子け
た右は同音然とふ倫事とんは作まし先くいんを下のおハ
弟集よと音又ん付るをこと指す事とハ下り存事には付れ

其歌一首ハ

あまのけりてかひんをう下り鳴る蛙あふふたういあこいむあハ
乞弟一巻林より内也今一首ハ

朝露ういなる下ふたう陸芝のいほあることほんこも
同茅十六巻内やそホ乃多心ハ山田のいふ子回をきふ
本居住書と縁居して山子^{今推}居の間証を成るを
きう丁別居のなり所めとせらふお守の取せ又ういふと
心まは序の下ふたうゆり^{今推}相と多うりしり或令拵
衆牧或令去猿床也けけ致床者縁非有兩儀至干烟
炎者う為二爰者而近古^{今推}出異説者けのいふこと
木をいふゆりて摺と稱ハ舊事也其て之を拵と稱
かひ凡ういふこと^{今推}是尚修説也而今同系ハ其時
田舎子登とら^{今推}屋と稱^{今推}何屋か^{今推}其所^{今推}蛭取^{今推}食^{今推}登

也言^{今推}け^{今推}不足^{今推}言^{今推}歎^{今推}登^{今推}何^{今推}の^{今推}屋^{今推}と^{今推}ハ^{今推}登^{今推}室^{今推}と^{今推}う^{今推}け^{今推}け^{今推}は^{今推}是^{今推}別
後^{今推}れ^{今推}銘^{今推}居^{今推}名^{今推}出^{今推}て^{今推}行^{今推}り^{今推}ま^{今推}の^{今推}に^{今推}い^{今推}ま^{今推}け^{今推}ま^{今推}は^{今推}と^{今推}を^{今推}い^{今推}り^{今推}ま^{今推}ま
初^{今推}子^{今推}日^{今推}玉^{今推}け^{今推}ま^{今推}を^{今推}と^{今推}し^{今推}て^{今推}登^{今推}室^{今推}と^{今推}う^{今推}ま^{今推}け^{今推}け^{今推}ハ^{今推}禮^{今推}と^{今推}し^{今推}り^{今推}ま^{今推}ま
と^{今推}い^{今推}ま^{今推}ま^{今推}ハ^{今推}登^{今推}何^{今推}と^{今推}ら^{今推}ま^{今推}正^{今推}月^{今推}初^{今推}吉^{今推}午^{今推}申^{今推}ま^{今推}せ^{今推}ら^{今推}ま^{今推}ま
か^{今推}ひ^{今推}ま^{今推}と^{今推}稱^{今推}して^{今推}登^{今推}乃^{今推}胤^{今推}と^{今推}い^{今推}ま^{今推}て^{今推}暖^{今推}日^{今推}ま^{今推}あ^{今推}り^{今推}め^{今推}け^{今推}て
之^{今推}月^{今推}年^{今推}日^{今推}初^{今推}て^{今推}桑^{今推}ま^{今推}け^{今推}く^{今推}四^{今推}五^{今推}月^{今推}ま^{今推}ゆ^{今推}と^{今推}い^{今推}り^{今推}す^{今推}と^{今推}い^{今推}ま^{今推}
め^{今推}け^{今推}ち^{今推}氏^{今推}所^{今推}ま^{今推}を^{今推}と^{今推}し^{今推}て^{今推}登^{今推}室^{今推}乃^{今推}胤^{今推}と^{今推}い^{今推}ま^{今推}て^{今推}何^{今推}を^{今推}用^{今推}証^{今推}と^{今推}い^{今推}ま^{今推}
入^{今推}て^{今推}あ^{今推}令^{今推}施^{今推}其^{今推}登^{今推}乎^{今推}況^{今推}登^{今推}養^{今推}之^{今推}家^{今推}伴^{今推}全^{今推}不^{今推}可^{今推}掘^{今推}澁^{今推}澁
更^{今推}ふ^{今推}の^{今推}湛^{今推}池^{今推}沿^{今推}河^{今推}津^{今推}竹^{今推}因^{今推}可^{今推}令^{今推}穿^{今推}住^{今推}乎^{今推}凡^{今推}蝦^{今推}臺^{今推}ハ^{今推}本
自^{今推}是^{今推}所^{今推}の^{今推}處^{今推}ニ^{今推}穿^{今推}住^{今推}者^{今推}也^{今推}其^{今推}ノ^{今推}音^{今推}惠^{今推}帝^{今推}墓^{今推}と^{今推}い^{今推}り^{今推}ま^{今推}

又人丸集子こく新山くひん下り崎かきしとあつた
山田のよむいせしと又人きま

判云右くひんくらの畑いあ方四着より久し付く一は弁難係
未取ぬはくしとまはあ集子の事や世の事よからや乃
こくをましく記し付く事切こく今世間をましくおあ
つて付く事と但し右方志とこく新くしと事のたれ
こくましくぬやいしと免付れくひのこくお存いとま
とく付あま

別船傳云芝舟くひん下り崎とくひん下り新前
乃世のあはれおはははま集子二首付く世の朝あか

いんくまの崎とくひん下り崎とくひん下り新前
付くし世と今の志願とくひん下り崎とくひん下り新前
あしとくひん下り崎とくひん下り新前
乃崎とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前

はあし世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前
世とくひん下り崎とくひん下り新前

欵考詩

養得昔令扶 病開未本是待蛙鳴

而今寧可烟窓の右寄小山田とくうひやう下の烟といふも
已是秋芥も心世仍たやまやしの事すく之中待定
乃時二ハ之實に堀川院百首氷寄よ

はすしおらとぬ けらまうはけしかいやう下の氷は
是ハあしはけよくしやとらあすけらうぬはけと江川
乃ぬらしむはまともうはけて魚もほとてこをよ
よふらけうと舞て回のらるものやに昔や道なるほど打
けてあそんもせふよふりすぬらとてぬらとくぬら

まこらぬして魚とくわらぬ^魚は昔屋と飼をりあはぬ
金草氏おあすいアサうけはけけりやけらかやとよ
を定てあうとえアサうけのまかかぬ^魚よふとくぬし
よあはまおけらうらまふよままふちまうはけしかにやう
とよましぬまはち良うはよおけらうけはて其てお物と
聞ていそいそをさけけりけ免れけり疑或やうまもさす
をよよふらちけぬと或は上れおけりぬしてよふらまの
形も亦はあまやとすのよのおもあそ其まよりこともあは
まきてはくうふ極のやうすとまて其よるおまもて魚と
あつむ其屋に二頁後とあうとぬらう唐もあつむとて

とけけしうちも木たしよゆらうけし魚のりよりぬん
思ふまふありやうしてしめけてしるまねとにやんともつて
やえいふし尸事もありしりれりらやとに或はかくたも
いし或はかくるししし或はやとに所よきらうて捕獲
形り直るも石同也これいあはるらにかひやのあききおぬ
しはけとて睡しりり兵部所とあともなるまよたあのみと
おぼありあつて奥とありめすまよともたけりてとも
新んころりぬるとおけしよまに所よくひ打きてしるしとあま
かしくしてけりる甚とえんをくしむ人のかひやのぬとも不
知くしやよふぬともお知して疑思んををこらうつたり

新んころりぬるとおけしよまに所よくひ打きてしるしとあま

一よハ敦隆うお原万羊集よはくしやう下お弁二首と
并ふ

あしひまの山田もぬむ乃とくらひのきこられやあま
けまうしの上と首とにけまをたのきふ入りおらこのかひを
申し原なる原し昔香火屋よいもれともサニ整たるな
たりしと心えしとてけり敦隆も博覧のまをりし万羊集
能く新簡とて部おすけりるれはひあくも助てしるハ
け火しと心えしとけりけり肥後大進忠兼ともけり款うこま
通宗朝はり外孫隆源阿闍梨り外甥也おぬれ万羊集

ふり付き小蓋を付し付するを何れと云ふ所を
おた居し蓋付すそのよふ尋ね云致さるる所を
なふり付し其の蓋を利くやといふ人など
と申付り山田村の産の山をきつてはれり
おゆを致したるは種時といふも付さ但万
葉子麻子もちよ大ともちりいは集に
こしも有或は一所に正字をともみぬ
こともあはれ大をすすも付し偏に
万葉子の付し付し其の付しと不見付し
ふと海にみよとてぬけふはけまの
と

おま宮大夫九うはけのふふ道付り
養すとして利かるといふて人ふ
くいするを二ふと國とあり又や
すうゆ^ふやいふるふいふるのふ^ふそれ
ふと尋ねくてもしてふもせと
てゆき事一室也且に堂のあたりに
付りしす又おゆははけり人の
けりおゆは其のふと尋ねり
るを件のおゆのふと尋ねり
うはけのふと尋ねり不可なりけ
あふふと尋ねり

中神所執のゆへに月もれ多と略して傳へ民の心
を安んずして未だ往我の別者も力を入れて委神
丁傳已に平素お遣せむと返服事也折を志田倉登
之次第甚以世益れ但判者河に登答倉屋中ニ其
池も甚く蛇と令栖丁登地倉丁と付る利に
如く此の外少伝を付る烟如く玉方相伝し玉
あり神し玉中登地玉みとせし玉また玉
不う難れ又世の行ふ田園の戻と好定し
けきしと後折よハ

と承るなりしあひやうし丁すむ世よりあされにやわ
うあし

と傳へ付るはいんやんも居たりしむ
打はるせむ事之謀家の華林院山城の井の
尋折中へ外にけりし玉春六右月
判者も経同しりし心はくし其判河上
守末也此位毛と懸居して山中ふ
丁判居の原をせば心同乃奇也又
乃下へ夫ゆゆしし烟を多のりし
今去極原也然に於牧原と維有
一たふ矣し今案此も已為金言
處折折疑不可也山田倉下

拂拭を已敷陸よりたのみに付も付され然らば字
了る付を床たるにちけりあまひけりゆりやたり
是等今を待床し付来いり付へりむ其別は床はた
といふ宛ありともいふ床は床をさすよ巨西端
極は不狂床付り又敷た山田乃らるゆりむよ
アノし床をたおす人の山ノ床とあさやうよいり立
こゝろに方にはたをさしてせうとけけいと言はれむ
とらふをたすれ床はたをさしていつちもたぬと床の
たちしるゆりたしよあわけてまゆの床とあさして付り
随いてあ付付はあまひあまひむよ床はたなりと

アノてまをたんと示り付はたをさして床をたす
ゆりあまひとあまひむよとす万葉のあまひと
いふの定にて付もむをたすて巨はたをたす又山田
おろろよくゆり人の山の山腰間休もたあまひ付りて
おのてりてあまひむよとす甚ふて有まの山腰間休も
あまひの床もあまひとす虚もあまひをさしてあまひはゆり付
らぬ又敷たをたすゆりむよとすたはたあまひと
まの事細アノ事あまひとすむよとすむよとすむよとす
よまのこいひあまひあまひ付りゆりむよとすたの初まは
はあまひ又敷あまひとすあまひとすあまひとすあまひと

閑て急げたりけむるよりありん次乃奇もつての書ま
せぬきの心こもるやう中ふつと其おぼえ思ふよりけり
よ久はげまお閑の心又十巻うー誦教奇作よ

林田よりつづいて序つてまゝまゝとれが奇くきりし
此奇くおまをれとつうなれは極り極りとも思はれま
らんよ由おめの子を極りよ、けりお山田をちりつてひま
たうちてこまはもむともけり色様う極りとも精定又うい
うも極り極りい打さう出たう奇とわいやらもともいふ
おまことあましく閑ゆとけりあうくも極り下り極
極りり奇ハ万まうま三首けりうせりますうおまごうハ

回書まあり下二句ハ又閑所乃意おりぬいり奇れま
初のまこきりし性とも別よの巻もあけりとも奇
井お極の奇くと打さうせりも奇しけり今乃奇
多かんけりも仍わりの性も別してういやらも極りり
誦してけりも又右方作者のまハかひやハ極り極り
よまけりも其まよ山田も極りも奇りまもかひなれはま
おまもと極り極りも二句おぬきりまもかひなれはま
まもかひなれはまもかひなれはまもかひなれはま
書係といたままこ(ま判者まハかひなれは山田の廬マ
けりも田まもまもかひなれはまもかひなれはま
けりも田まもまもかひなれはまもかひなれはま

けふも昔の昔十巻秋雅寄く入せり新たゆひ
弄乃けふ林とよは河をれと思て思ふと林の
あやう入せりもつひなうはあはうとれゆき
又平十巻を平一巻と評きたる年あやうりり又林
お聞一ち中よ

茅虫

和くすこひなういふやうに蛇め前

又茅草

はるるはあさる川よのさうらうとやううのて
まをりよのさうのさゆいしあはうとつとつ
今の節し

今葉よはたの麻虫をういふ乃麻乃虫とよま
はけり下れまう麻草のすま加へり思たふと題と
茅草とまたり麻のふむままにこそ利くか
弄よ入アを付く先又右方作者云人丸うふ
こう山くひなう下ふあう陸

とあま山う山田をほあう婦はけのまあるる
やうに種付き陳云世間法布れ人丸集を不世のう
存付きそのゆき人丸弄万葉集う四百余首入たり
先その弄太首うれ入てのうまあまのけうの歌とよ
いり入付きあう而あま歌を殊うふ付たりそれけり

こゝろにて年々人丸集敷すやうかゞひ足付りし小
一帯より七ころの山を尋入りて不又路又下り
ハハハ付りてやう決まりし川にけけりてハハハ
首をくハハハ裁す世の取也す也^云古^云美^云集

小

カトママンシタヒカシタ

金山名目下みまぐらむをくふたういふとけり

とよき付りし初五まの白と或ハハハ山のとうと或ハ
あま山のしよあまけきとやいんふととくまやうくま
形く陸とくまおしきりややアアアアアアアアア
万まや集あやをくくくくくくくくくくくくくく

たゞい一取見せとてころの山乃尋人丸集く付りて
不見及付りしとれけれを靴信受れ又了付りて
と山より山川あり尋人丸集く川よりゆきはくはす
あれをすはけのひは位あり山向あり前了付りて
この山を何おも付りてやれ山をたけ移り山向りし
山川をたけりしとて尋人丸集くあまこれとせあまの
ま付りけころ山をたけ右に不審たり前了付りて
不吉吉吉夫堀川院前了りて尋人丸集く百有ま集りて
別子備事とて尋人丸集くあまこれ^云付りし付りてハ
ゆきはけれくハハハ集りて了付りて御す店く

乃王位の一家大臣の御をばしりて當世をさし
この道乃聖旨となゆことと付し事を以事定
て習い付しけりも付しむは詠をさすてさうく
此採の儀もさす事にもむさ有御り歎かすまは
可もあし付しぬをさる者さすけりも詠してこの
さる事とおもふあり別者も附し方と又丁度付
付し事と存することとすたる間事終まりて又詠
く付し事と詠しけりけりけりけりけりけりけり
おもふ事と詠しけりけりけりけりけりけりけり
代としけりけりけりけりけりけりけりけりけり
代としけりけりけりけりけりけりけりけりけり

夏上

夏州

左頭昭

下川多抄聖一はらさすは新編をりてと詠しけりけり
右方申云せ別難

判云は新抄の与し其のふのすうとありけりけり
一はらさすはけりけりけりけりけりけりけり
乃聖としけりけりけりけりけりけりけり

新編陳申云考新抄集云詠及事可
夏州を詠しけりけりけりけりけりけりけり
この詠は新抄をけりけりけりけりけりけり

此の書は古くは其のまじりてはまじりては
夏草をいふ中不詠其草はせむとも付しは夏草
の即ち此の行きて去けくたうゆへ草のあり也
天曆五言も夏草歌一巻有り

左

忠見

夏草此中を落しにたれしは人あしとす
右 兼盛

此の原はぬらふしふけりおぼあしき此松のまゝあて
けおむも其草ははらふ事ありけい今お奇も蘇
此草のすういりて夏草といふもの付しぬら(万葉)

人丸弄ふ

玉とてはとほをすくは夏草此松のまゝ
と付しは中歌のまのふやうて夏草の即ちはら
はらむてはらや蘇も夏草といふて付しぬら
夏草も蘇の葉はすういりてはらや

又お奇ふ

夏草のまけはらはらひゆれきれお奇ふ
お奇ふはあゆも夏草はら夏草にあてのまゝてはら
ゆらにお奇ふも今お奇も夏草はらはら
お奇ふのまゝてはらお奇ふのまゝてはら夏草の

はるき日晴花五月の経も得ぬぬれあり
とて身に出ししふ同人之をけき弟之句にきき
事いふ^えしとて初めとて心ゆるし付時
後将子夏衣係着きて翌日とて

兼輔中納言

経の片やまにはさ妙北家の石を以て
とて初め初めとて^えしとて付りしとて大畧
関白之事もあつて先弟之句に付りしとて
それと腰白なれとていせし後、初め北院と
いふをきりしとて事とて^えしとて其の事

はるき日晴花五月の経も得ぬぬれあり
とて身に出ししふ同人之をけき弟之句にきき
事いふ^えしとて初めとて心ゆるし付時
後将子夏衣係着きて翌日とて

夏下

蝉

左顯昭

ゆめよ山石乃葉月とてちとて
右申云けしとて

あまき

別云左はまの川の巻風はけよたつてふらふら
付れとやもるふのやうなるをくむかの巻
う巻花乃けりあき事と但松の風は打
まやふふてまや付はけりけり
別松凍よ云松の風よもあはれは
とけきよとらふてはけき
一は松の巻風はほつてまらふ
あふふあまき松とらふては
ねと付をいふとけり後打松居住を

よ丸り舞に

住吉はしきほの海は松新て松の巻風
けきいふのうま^えねとわらう舞かた
ふの巻風はあまの目出はるま
よのあまあまに思はるはけむまの思
ふまよあま^は乃んまはけり勢い
不難けりけり

秋上

鶺鴒

左顯昭

多岐にわたり難を免らむに付しこそ直ぐに備付り
全葉集にほらるる事聖なるにけりふいふ事
なほしけむしにけりふの事後集に記せしけれハ

相摸

あしき事一尺の青もたせぬいふ事ふすくはよ
又史記云暴風雷雨ミ暴風を主聖なる風と訓せり
乙付危くしてめて御まふあしき事とせし御せる暴風
乃ち文く「お付に聖王臨を」と可云亦右方の尋甚に
甚恨云「又おまふけりくハ万葉抄云美事けり古に
お付に付いふ事と云へし」但おまふけりけりもいふ詞を

けりまふけりけりけりあまふけりけりけりけり
あしき事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
おまふけりけりけりけりけりけりけりけりけり
たのたまふ事あしき後集の事れけりけりけり

いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
けりけりけりけりけりけりけりけりけり
おまふけりけりけりけりけりけりけり
たのたまふ事いふ事いふ事いふ事
おまふけりけりけりけりけりけり
たのたまふ事いふ事いふ事いふ事

けりしこを接は乃れ花をて小尾をさそふて付るは花よ
をさすはあし一の花を無ししり花も付らあまふと花は一定
小尾あし一し所は三尾の花尾はまき舞りつとくとも竹乃すま
ふしとてあまふしにすまひけり花もさきに色くは花
はさしけり花のいろのいろはさきさきあし一む花のさ
るさし花も花もさき所はけりさきさき山家のさうさ
てを付し又花はしき花もさきさき花はしきと云す
花もさき花もさき花もさき花もさき

九月九日

左頭昭

かきばらふさけさしはさきさき菊の色もさきさき花も白あはさき

右方申云さき菊は係ふさき 左陳云義和菊也義和花
菊も好仍さき菊もさき也 右方申云万菊もさきさき
さきさきさきさき乃心あささき色は花もさきさきさき
菊もさきさき

判云花はさき花のさきさきさきさきさきさきさき
菊もさきさきの中を近さきさきさきさきさきさき
菊もさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
菊もさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
九月九日名所之菊は花もさきさき大保王弘令白衣使賜花云

りまを同車なり又はお徳のまじり山内のはなれも
かゝりまのまゝ栗あきつとん^えらとけりやうな相違
ふたりの根を根はなれまゝあはまうまらお徳
春日まゝとまをきき

かゝりまのまゝ栗あきつとんまのまゝみまき限すま
古今ふまを栗れはなれまゝのまげりまをきき

まのまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

まのまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

まのまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

まのまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

まのまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき
同徳のまゝ栗あきつとんまのまげりまをきき

と云ふ一書ふの原もも海はるあてをいほ山といふもぬハ
叡山おやともの大京とや思ふんすらむして海への内はるあて
を要する一は山をよもむるなりけしとてなり二条后の大京
行啓子五郎中侍治云

ちほくは山嶺の山といふもハ神代のももねもいせし色
らむとむと一山は山は山なりあつふ昔は山は山なり
アそ神代のことふけては山は山なりいせも世もあはのふを
いふやとて貫之うのあは

大とくやとくほの山乃山根京とや承さうむとちのかけを
そみ藤氏お舟おのりて山嶺の山根京をせむもハ但後治達

小云之傳院河内大嘗會御櫻歌すまての頃言のやうにけん
大京とていへりりる山將の屋乃もふけりて一山は
代もともむそおあうなを京開て山嶺の山根京をせむ

伊勢大輔

返一

山嶺指もいへりけりはらう一山は山根京の山根京をせむ
けそは河内大京よ住りはらうをけりて山乃大京おや而山嶺山
をよもむるあや一山は山根京を伊勢大輔を代りて山根京を
いせしは山根京をよもむることを知りてけりり免又僻事と稱
多しは山根京はよもむる勅撰よもむる色けりし山根京を山根京の
山根京をよもむる山根京の山根京をけりてあははやとて又は山根大

何所よりよきとけりとも大なることあたらずと疑わんも付きて
是をけりとおぼし^え付くとは集のけり良遣法師大京より
居ぬしあるし大京もまふはたけを大京殿より引て後拾
遺を自六つと記せり所のふとひかやふらなけりてよむや
後拾遺集

すけり花事しとれれえ後拾遺を家よりまうわをたけり山
先大京の菅原依とあり又たやわと

いけりてよき世に居るえすけりやもこのけりのおまはら
くやうおぼしはし後拾遺の河に菅原あやむまうら君共あま付り
女も男もまひはけりけり甲鏡て後ふとやい付りけり

すけりや依えりけりとのあましと通ひり人のあまも鏡のま

けり菅原とやうけりてまあけり^本家と大京乃定すま
けりせきとえり和歌のちけりやすまやうのた系とい大京山と
けりてせり後拾遺集

和歌武辨

西の山とてまきけりやうけりぬる大京山のまれむまき
又良遣法師乃ととけりて

藤原國房

おとしやあましとけりけりて大京山乃林とあまれ
けり同集の藤原教敏が侍まうま勢けりる七夜よりあま
小京大けり山乃るあまれがまきいたまはけりてまきむ
是にまうけり山を大京山と仰てあ氏の心をけりてまきこけり小京山の

藤元輔

左方甲云云指難

判云左方山屋いとをけふきの朝をたふあは別くともま
をまにけ御うね村うそそ了付又朝心あふ川とまはり
よ

形略陸尸云より手乾の心ふあふ茶の茶もまじふれ
核を死ひ付りて山の中かま付りて又山を
信ありしにも付せん但乾川とぬりてけけりぬ村
と付るを石まき付るは山は河不可有とい誰り定付り山
家山ちうさ民のまきうとて山は河もあてりま大難うも
其原を河の山とて流出て付るは山を山を山を山を

河戸ふあにけの水をまて堰根ふて山川を流し前の
山川またあてとてりり川は干流川とて細をうりて
まきりてはまをまてけりすあゆまもまもまもま
てまあしはうまもまもまもまの川をかけしもま平
ままあけて付けあまもまもまもまもまもまもまも
山をま住居をまもまもまもまもまもまもまもまも
河にま付まもまもまもまもまもまもまもまもまも
川原の水をぬりてまもまもまもまもまもまもまも
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

心をあつては心をも精進のあつては朝の朝すく
りし世をまの御手にて是れをうたふ御手ふりては
かみくもにたはるはる

寒松

左頭昭

この山もはるはるまきてては山風をゆりけぬ
左右ともまを指指申旨ゆりけぬ

判云たりの山もはるはるはるまきてては山風をゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
かみくもにたはるはる
かみくもにたはるはる
かみくもにたはるはる
かみくもにたはるはる

まを指指申旨ゆりけぬ

伊勢大輔

まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ

まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ

まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ
まを指指申旨ゆりけぬ

まを指指申旨ゆりけぬ

くは萩を新しおせあざらと押しあひくしては萩は又
とかり痛に同しとあすすいはらすふは萩かといは
しりれしかりあふこと 信付れ

又美葉よ

なすふもさげゆいあうもおけのけけうきまては
なすれて何ともあうすふけけうきまては
あふんと同りれけいさなふけうすのかり萩あやうよ不

僻事歌

推察

左頭歌

止いのまう形もまたなる推察こやてまをくさやあひむ

左甲云こやてまをくさやあひむ

判云推乃こやてまを推はわらうふはあふくよと不問か

源解云 美葉集よ

をまはるもはあひむ *あふをらまひのこやてはあひむ*

とあるまの推のこやてはあひむと尋付て乃上も事也左方
うたけを何もうすまは推のこやて推察しやもま
はさうても同くは付らも美葉集の推のこやてのほは不叶
ことあ付くむ 抑事曙とよ題はは其のあけはのや

よあうとて念念と右方よりけり 推察より美葉集の推のこやて
と作らうとて推察とす判者いすめられぬ進

退きしよりして先升畧れ自今以後起て終てりて何れも
可お侍平古分集り見給やう

とよもそよみかかろまうくは色におあひりらすあやさ
とよもはけりもまの心はまの心とて花をいぢり付色
あやさに

此二帖或仁所持之間も借用加一見一處云詞云歌云番事
多之非正奉上者宜書寫之謬然然而家之伝此一様
之間任一統不及直付只如件奉馳弟と寫之更不可
信用後日一見人以謬奉の直付也

以弟子花多并中細
性録卿 筆跡也自云寶院
法名宋雅
准后拜領之

和歌所舊生法印堯寿判

